

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月28日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17192

研究課題名(和文) 故郷喪失と他郷暮らし：福島第一原発事故による避難生活者のライフストーリー聞き取り

研究課題名(英文) Loss of Hometown and Living in a Strange Land: Life-stories of the Evacuees by Fukushima Nuclear Power Plant Accident

研究代表者

黒坂 愛衣 (KUROSAKA, Ai)

東北学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：50738119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：「帰還困難区域」に指定された福島県飯舘村長泥行政区の人々との協働で、長泥の記録誌を作成し出版した。原発事故以前の長泥集落の人々の暮らしと、事故後の長期避難の生活のありようを、ライフストーリー聞き取りのかたちで記録することができた。

三春町内につくられた富岡町仮設住宅では、避難者がもつ種々のネットワークを生かした「避難先での夏祭り」の参与観察を行なった。帰還/避難継続/移住で揺れる人々のライフストーリーの記録を蓄積した。

研究成果の概要(英文)：I compiled and published the documents of the evacuees from Nagadoro community in Iitate Village which was designated a Difficult-to-Return Zone, in collaboration with the representatives of the evacuees themselves and other members of editorial board. We vigorously performed life-story interviews as many as possible. By doing so, we could establish a record of the life styles that Nagadoro people enjoyed before the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident and their struggles of living as evacuees after the accident.

I executed one more research plan. That is a field work in the temporary housing built in Miharu Town for the evacuees from Tomioka Town. I and my students carried out participant observations of various events such as a summer festival where many supporters gathered. And also, I accumulated life story interviews with the evacuees. Their orientations are wavering among 'wish to return home', 'continue the situation of evacuation', or 'move to another place'.

研究分野：社会学

キーワード：原発事故 避難生活 ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請時、東京電力福島第一原子力発電所事故から3年半が経過していた。その時点で、わたしは福島市内で避難生活を送る飯館村長泥行政区の役員の人々との交流があった。また福島県三春町内につくられた富岡町および葛尾村の仮設住宅を訪問していた。

長期避難を強いられた人々との交流をとおして、わたしは、原発事故が人々の生にどのような影響を与えてきているのかを、避難指示区域の線引き(「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」および「区域外」)の境界を超えて理解したいと考えたようになった。帰還/避難継続/移住をめぐる人々の苦悩について、各人の人生体験および社会的背景を押さえつつ、このような区域の線引きによって分断されることなくトータルに捉えたいと考えたのである。端的に言えば、原発事故がおきる以前の元の集落

本研究課題では「故郷」と呼ぶに出された避難指示が解除される見込みがなく戻る希望をもてない人々、故郷に戻るか避難を続けるか移住するか選択を迫られ引き裂かれる人々、避難指示区域の外であるのだから避難の必要なしとされた人々の、それぞれが抱える苦悩についてである。(ただし本研究では、人々への接近はかなわなかった。)

避難指示区域の線引きは、東京電力からの賠償や行政による支援の対象となるかどうか(およびその軽重)の線引きでもあるため、避難者同士、あるいは避難者とそれ以外の人々のあいだにさまざまな軋轢を生みかねないものであることが、現地の人々との交流をとおして伺えた(「賠償金をもらっている」ことのスティグマ化)。避難の長期化による避難者と受け入れ自治体住民との関係性への影響についての懸念もあった。原発事故による人々の生への影響をトータルに捉えることで、このような避難指示区域による人々の分断や軋轢を乗り越えることにつながれらばと考えた。

申請当時、飯館村は全村が避難指示区域となっており行政機能も福島市内に移されていた。20ある行政区のうち19は「避難指示解除準備区域」または「居住制限区域」であり、長泥行政区は村内で唯一の「帰還困難区域」であった。

富岡町および葛尾村もまた全町・全村避難となっていた。両町村とも「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」を抱えていた。中通りに位置する三春町には、富岡町の仮設住宅が9カ所、葛尾村の仮設住宅が6カ所つくられていた。

2. 研究の目的

福島第一原発事故の影響により避難生活をよぎなくされている人々 具体的には、福島市内の仮設住宅等で暮らす飯館村民、お

よび福島県三春町内の仮設住宅等で暮らす葛尾村民および富岡町民 からライフストーリーの聞き取りを行ない、事故から4年が経過して以降における、避難生活者たちの多様な体験の記録を蓄積する。そのデータをもとに、原発避難者たちの故郷喪失 体験のありよう、仮設住宅や借上住宅での他郷暮らし 体験のありよう、長びく避難生活によりもたらされた家族関係やコミュニティの変化、生活再建に立ちあがる課題、放射線への不安と「風評被害」の影響、避難指示区域の3つの線引き(の矛盾)のもとで生じる帰郷をめぐる問題等々、原発避難の現実と、その背景にある社会構造を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、「ライフストーリー聞き取り」「現場を訪問してフィールドノートをつける」という質的調査の手法を用いた。聞き取り調査では「原発事故をめぐる情報収集」というスタイルではなく、語り手たちの子どもころから現在までの人生を「トータルに語ってもらおう」とスタイルをとった。この聞き方によって、原発事故によって奪われた故郷がどのようなものであったかが、言語化されることになる。同時に、「原発避難者」という存在の多様性も、おのずから明らかになる。申請時までに関係を築いてきた各町村の行政区長や、仮設住宅の自治会長などに仲介を頼み、あらたな語り手を紹介してもらった。調査を広げていった。

ただし葛尾村については、すでに体験記録集が完成しているとのことで、採択1年目の終わり頃からは語り手をあらたに紹介してもらうことが困難になった。以後は、主として飯館村民と富岡町民を対象に聞き取り調査を進めた。

4. 研究成果

本研究は思いがけず、避難生活者が主体の活動に関わることになった。成果についてはこれに関連させつつ大きく2点を挙げる(1、2)。また、本研究課題は時間経過とともに問題状況自体が大きく動くものであることから、最後に、現時点の状況報告として1点述べておく(3)。

なお、「原発事故による人々の生への影響を避難指示区域の分断を超えてトータルに捉える」という申請時点の問題関心はいまも変わらずにあり、今後も調査研究を継続していきたいと考える。

(1)長泥記録誌の出版

長泥行政区の役員の発案により「部落誌」が作成されることになり、そのために発足した長泥記録誌編集委員会(委員長:山中知彦・新潟県立大学教授/当時)にわたしも「聞き取り班」として加わった。おなじく委員に加わった福岡安則・埼玉大学名誉教授、佐藤忍・団体職員とともに、チームとして福島県

内で避難生活を送る長泥住民からの聞き取り 14 ケース（夫婦や親子を一緒に聞いている事例があるため語り手は全部で 25 名）を実施した。

記録誌作成の過程で編集委員会の地元委員らから次のような要望が出た。「われわれはいつ長泥へ戻れるか見通しがまったくない。長泥住民の避難先は県内・県外さまざま。これまではなんとか行政区のまとまりを失わずにやってきたが、今後は時間の経過とともに住民がバラバラになっていくだろう。長泥が忘れられてしまうだろう。ぜひ、幼い孫たちに見せて『これがわたしたちの故郷だよ』と伝えられるような本を作ってもらいたい」「でも、長泥の人が読むだけでなく、よその人たちにも広く読んでもらいたい。原発事故によってわれわれがどんな苦難を歩むことになったか、多くの人に知ってほしい。したがって、わたしたちの聞き取り調査では必然的に“原発事故以前の長泥の暮らし”と“原発事故後の避難生活”のそれぞれを丁寧に語ってもらうこととなった。なお編集委員会の写真班（関根学氏、前田せいめい氏）では、事故後に立入りが制限され無人となっている長泥行政区内のような、避難先での長泥の人々を写真に記録したほか、長泥住民が手元に残していたかつての長泥の暮らしの写真を集めて記録誌に掲載することで、地元委員らの要望に応えている。

この成果として出版されたのが長泥記録誌編集委員会編『もどれない故郷ながどろ

飯館村帰還困難区域の記憶』（芙蓉書房出版、2016）である。本書は「第 40 回福島民報出版文化賞」正賞を受賞した。

聞き取りでは、60 代以上の高齢世代が語り手の大多数を占めた（編集委員会地元委員＝役員の紹介であったことによる）。とりわけ 60 代後半～70 代の男性の語り手たちは、高度経済成長期、勤め人としての就職先を得て飯館村を出てゆく同世代の若者を見送りながら、村内でも最も山あいに位置する長泥に「農家の長男（跡取り）」として残った人々であった。現金収入を求めて東京などに出稼ぎに行った一時期を除けば、基本的には職住一致の環境で人生の大部分を過ごしている。かれらは同じ小中学校に通った先輩後輩であり、青年団などの地域活動をともした仲間であり、自営農家としてはライバル同士でもあった。序列の厳しい消防団、長泥野球チーム創設、「田植え踊り」の復活など、若き日に地域の活性化に貢献した思い出が、この年代の男性たちからしばしば語られた。減反政策により農業の先行きが危ぶまれるようになると、乳牛の飼育や墓石の加工などに家業の重心を移すケースもあった。

いっぽう女性の多くは他の地域の生まれで長泥の農家に「嫁」に入った人々であった。生まれた子は「姑」「舅」に面倒をみてもらい、若い夫婦はもっぱら農作業に専念。自分が祖母の立場になって初めて子育てをする

という「孫育て」の慣習について語られた。

東日本大震災が発生し、原発事故が起きた。「まさか自分たちが避難することになるとは思わなかった」と語り手たちはいう。飯館村は第一原発から 30 キロメートル圏外にあり、事故からしばらくのあいだ政府が採用していた同心円状の避難区域からは外れていた。原発は海沿いに建設されており、山あいで暮らす長泥住民にとっては「原発事故」は遠い話であった。震災直後は、むしろ海沿いの地域からやってくる避難者の人々を迎え入れる側であった。実際には、風向きと降雪の影響で、長泥行政区には高濃度の放射性物質が降っていた。国はその事実を把握していたのに、住民にはずいぶんあとまで知らされなかったという怒りを語った人々がいる。

長期にわたる避難生活、そして帰還の目途が立たない 故郷喪失 の状況は、とりわけ高齢世代の男性に深いダメージを与えているように思われた。前述したように、この世代の男性にとっては、長泥に住居があるというだけでなく、幼少期から青年期を経ての人生の記憶や、日々の糧を得るための仕事、自己アイデンティティを支える人間関係の大部分が、長泥の地に結び付いて形成されているように思われるからだ。

(2) “避難先での夏祭り” 参与観察と聞き取り記録の蓄積

訪問を重ねるうちに、三春町にある富岡町・熊耳応急仮設住宅の M 自治会長からは「学生を連れて夏まつりに参加してほしい」と頼まれるようになった。2016 年 8 月 6 日、熊耳仮設の前の広場には大きな櫓が組まれていた。富岡の勇壮な太鼓が大人や子どもたちによって披露され、食べ物やおもちゃの屋台も出、最後には輪になっての盆踊り。このような本格的な夏祭り実現の背景には、熊耳仮設住民だけでなく、いまはバラバラの避難先にいる富岡町小浜行政区の青年会メンバーのつながりや（M 自治会長はこの行政区長であった）、富岡の太鼓文化を残そうと避難先でも練習を重ねてきた風童太鼓サークルの人々の努力、さらに三春町住民の協力（当初は富岡の櫓を運んで使う予定であったが放射能の心配があつて断念。困っていたところ、三春町のを貸してもらえたという。祭り当日も三春町の人々の参加があった）、県内外からのボランティアの参加があった。最後の盆踊りでは、富岡の踊りと三春の踊りが舞われたのが印象的であった。外部から参加したわたしのゼミの学生たちも、準備のテント張りや昼食のおにぎり作りから一緒に行なうことで、熊耳仮設住民の人々と交流をもつことができた。M 自治会長には積極的に周囲の人々を巻き込んで活動をつくる発想があり、わたしもそこに呼び込まれる一人であったことで、このような“避難先での夏祭り”の参与観察が可能になった。

わたしのゼミ学生たちにとって、熊耳仮設

住宅の夏祭りへの参加は、原発避難の問題についてアクチュアリティをもって理解する契機となった。まだ公表には至っていないが、これ以後に行なった飯館村民らの避難生活者の聞き取りにもゼミ学生は参加し、記録作成（音声おこし）の蓄積に寄与している。

(3)避難指示解除による状況変化

2015年6月12日、政府は「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」を2017年3月末までに解除する方針を示した。実際には、飯館村の長泥以外の19行政区は2017年3月31日に、富岡町の6行政区にまたがる「帰還困難区域」以外の地域は同年4月1日に、避難指示が解除されている。

三春町の仮設住宅で暮らす人々の置かれた状況は、この政府方針によって、より大きく変化していくことになる。避難指示解除が示唆された人々は、「避難者」でなくなり仮設住宅からの退去を迫られる期限が定まることになったからだ。仮設住民からの聞き取りでは、三春町内に建設される復興公営住宅に入居するのか、富岡町の故郷に帰還するのか、あるいはまた違うところに住まいを見つけるのか、避難指示解除後の行き先に思い悩む人々の姿があった。M自治会長は、避難指示解除後に富岡町の故郷に戻ることに決めた、数少ない人々のなかの一人であった。

帰還／避難継続／移住のそれぞれの選択をした人々の置かれた状況について今後も継続して調査する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

黒坂愛衣、故郷を追われて 福島調査フィールドノート、震災学、東北学院大学、vol.8、査読無、2016、118-123

〔学会発表〕(計1件)

黒坂愛衣、語りにみる「故郷喪失と他郷暮らし」 飯館村長泥行政区住民の聞き取りから、日本解放社会学会、2016

〔図書〕(計1件)

長泥記録誌編集委員会編、芙蓉書房出版、もどれない故郷ながどろ 飯館村帰還困難区域の記憶、2016、389 (編集委員会外部委員 黒坂愛衣)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

黒坂 愛衣 (KUROSAKA, Ai)

東北学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：50738119